有島記念館と歩む会
土香る会

March 2024
3月31日発行
17

P 1 ▶ 菊地昌子さん追悼 有島の新しい風 ― 菊地昌子さんを偲んで 井上 剛
P 4 ▶ 特 集「有島武郎を歩く」 有島灌漑溝下見会
有島灌漑溝を考える 梅田 滋
P 7 ▶ 特 集「有島武郎を歩く」 灌漑溝を歩いてみて 歩いた人① 藤波 ひとみ
P 8 ▶ 特 集「有島武郎を歩く」 灌漑溝を歩いてみて 歩いた人② 高木 直良
P 9 ▶ カリフト夜話の読み下し文を作りながら思うこと 斉藤 海三郎
P 10 ▶ 土香る会事業報告／有島記念館事業報告／ホームページの更新状況
P 11 ▶ あなたのこえ、みんなのこえ、わたしのこえ
「天から降ってくるスイカと大地に実るスイカ」 ニセコ町学習交流センターあそぶっく元館長 小坂 みゆき
P 14 ▶ 終わりにひとこと 櫻井 麻衣子

表紙デザイン（KSBデザインラボラトリー）

特 集「有島武郎を歩く」 有島灌漑溝下見会 より

有島灌漑溝の下見会を行いました。この目的は、有島灌漑溝の歴史的資源性について多くの人に知っていただくため、機会を見て広く呼びかけて探索会を開催することを目指し、そのために運営委員会内部で現地の状況を確認する下見調査を行おう、ということになったものです。運営委員会内部でもまだ現地見学をしたことがないメンバーもいたことから、この日は2時間以内で可能な範囲まで足を伸ばしてみることにしました。（特集本文より）

土香る会
ホームページ

有島の新しい風――菊地昌子さんを偲んで

菊地昌子さん、来館者の感想ノートから

土香る会　井上　剛

「来館者の感想ノートから」と題する菊地さんの文章が残されています（会報2号2016年10月1日発行）。現在の土香る会が誕生して初めての会報でしたので、それを寿ぐ気持ちから「新しい風が吹き始めました」と書いてくれたのでしょう。再掲します（一部略）。

このたび、土香る会として、新しい風が吹き始めました。

記念館の行事も音楽を楽しめる機会がふえていますが、他町村からの来客がかなりいらっしゃる実情です。思えば、有島記念館は、道内に限らず、全国的にも唯一の存在です。

ついこの間、時間があって来館者の感想ノートを読んでみました。六月頃から九月にかけて、兵庫県、奈良、東京、横浜、大阪と、夏の北海道旅行のお客様でしょう。三カ月で感想を書いてくださった方が、およそ百名でした。六月十七日に来られた姜尚中氏（かんさんじゅん）[注1]は、「有島武郎は現代に蘇えるべき先達者である」と、短い文ながら、意義深い言葉を残してくださいました。中学一年生は「一人の人生がこんなに長いなんて、びっくり！」と端的に感動しています。東京の方から「毎年夏に北海道に来ると、必ずここにくる。いつまでも大切にしてください」との伝言です。旭川の方は「思想が好きです」と書いています……。本館に架けられている横額の『相互扶助』の思想を改めて学ぶことが課題になりそうです。だいぶ以前のことですが、中学校の国語教科書に「生れ出づる悩み」の一部の文章が出ていたものです。ニセコ町の副読本として有島文学の一端がのせられてもいいのではと、私は希望したいです。

会員の住所はニセコ町に限らず、拡がりがあってうれしい存在ですし、このごろ移住した方にも是非「土香る会」に関心を持って頂くよう会報を通して交信もできたら、など―。（会報2号2016年10月1日発行 より）

横への広がりと縦の繋がりという大きな視点から考えていた昌子さん。中心に据えられていたのは有島武郎の「相互扶助」。その目の確かさに改めて教えられる思いです。

読書会の常連でもあった昌子さんですが、ある時突然に、こんなことができたらいいわねえとアイデアを披露してくれたことがありました。そのアイデアを企画案としてまとめてくれたのが、昌子さんの後任として副会長になった菊地寛さんでした。その企

四季あざやかな有島

画案を元に昌子さんの想いを辿ってみます。（一部略）

映像作品制作についての企画

*２０１９年４月総会にて、菊地昌子さんより標記の提案があり、企画素案をまとめました。

□仮タイトル：ニセコの詩　四季あざやかに・有島の里

森と清流と農耕地が豊かなハーモニーを奏でているニセコ町・有島の里。ここを舞台に、住み暮らす人々と訪れる人々の関わりとを重ね、春夏秋冬大きな自然に抱かれて息づく今を、大正・昭和・平成・令和と生きてきた九十代女性の眼差しを借りて、映像と詩（うた）で描きます。

ニセコ町有島地域は、作家有島武郎の名作の舞台であり、時に優しく時に厳しく、そして彩りあざやかな表情で今も人々を魅了しています。一帯は、広大な有島農場を不在地主の父から受け継いだ武郎が、自らの思想と生き方を一致させるべく、１９２２（大正11）年農場全域をここで働く68戸の農民に、土地共有・相互扶助の想いを託して無償解放し、その翌年、自らは命をたちました。その後幾多の変遷を経て今日に至る歴史があり、暮らしの地であり、心の故郷でもあるのです。

□撮影素材

[春]*山肌に雪形、野の花ほころぶ　*宮山千本桜満開に　*帰りなんいざ、田園まさに～田植え始まる　*伝統息づく斜段水路　*灌漑溝泥上げ住民力も　*新世代の挑戦が

[夏]*真夏の雷雨、干天に慈雨　*雨上がりの田畑、見守る案山子　清流守る心意気　*蛍舞う里づくり　*星座忌コンサートの旋律微笑む

[秋]*田畑実り、収穫の秋　*紅葉に染まるニセコの山々　*弥照神社秋祭り　*トレッキングの老若男女　*湯けむりに温泉宿の癒し　*晩秋足早、ニセコ文学

[冬]*猛吹雪に息づく生命　*銀世界に国際色　*春待つ響き冬花火　*純白輝く羊蹄山　*雪原に描く融雪模様　*農作業準備本格化　*有島の里は、緑なりき～

この企画案はとても素晴らしく役員（当時）も乗り気でしたが、経費がかかりすぎる、映像担当者の当てがない、数年を要する事業となるなどハードルが高く、お蔵入りになりました。また、同時に会員にも映像化のアイデアを募集したところ、いくつか寄せられました。その中に縦の繋がりを意識したアイデアがありましたので紹介します。（一部略）

私は、ニセコ地区の小中学校で見てもらえるようなものにしたらと思います。これからのニセコ、北海道、日本を背負っていく子ども達に有島の心を知ってほしいと思います。子ども達に有島の種を植えて育てていかれたら素晴らしいです。そうでなかったら、文学の意味がありません。過去のもので終わってしまったら、記念館は死んだものになってしまいます。

（授業風景の一例）問いかけから始めます。有島記念館に行くと目にする「相互扶助」という言葉。（四つの漢字それぞれの意味を紹介）「相互扶助」という言葉は何を表しているのでしょう？（話し合いの時間）有島武郎が「相互扶助」をいう言葉を掲げて農場を解放したのは今から百年も前。小作人たちは有島にお金を払って土地を耕していましたが、自分が何もせずに収入を得るのは間違っていると農場を解放したのです。しかも、所有者をそれぞれの小作人にはせず、土地全体をみんなで助け合い意見を

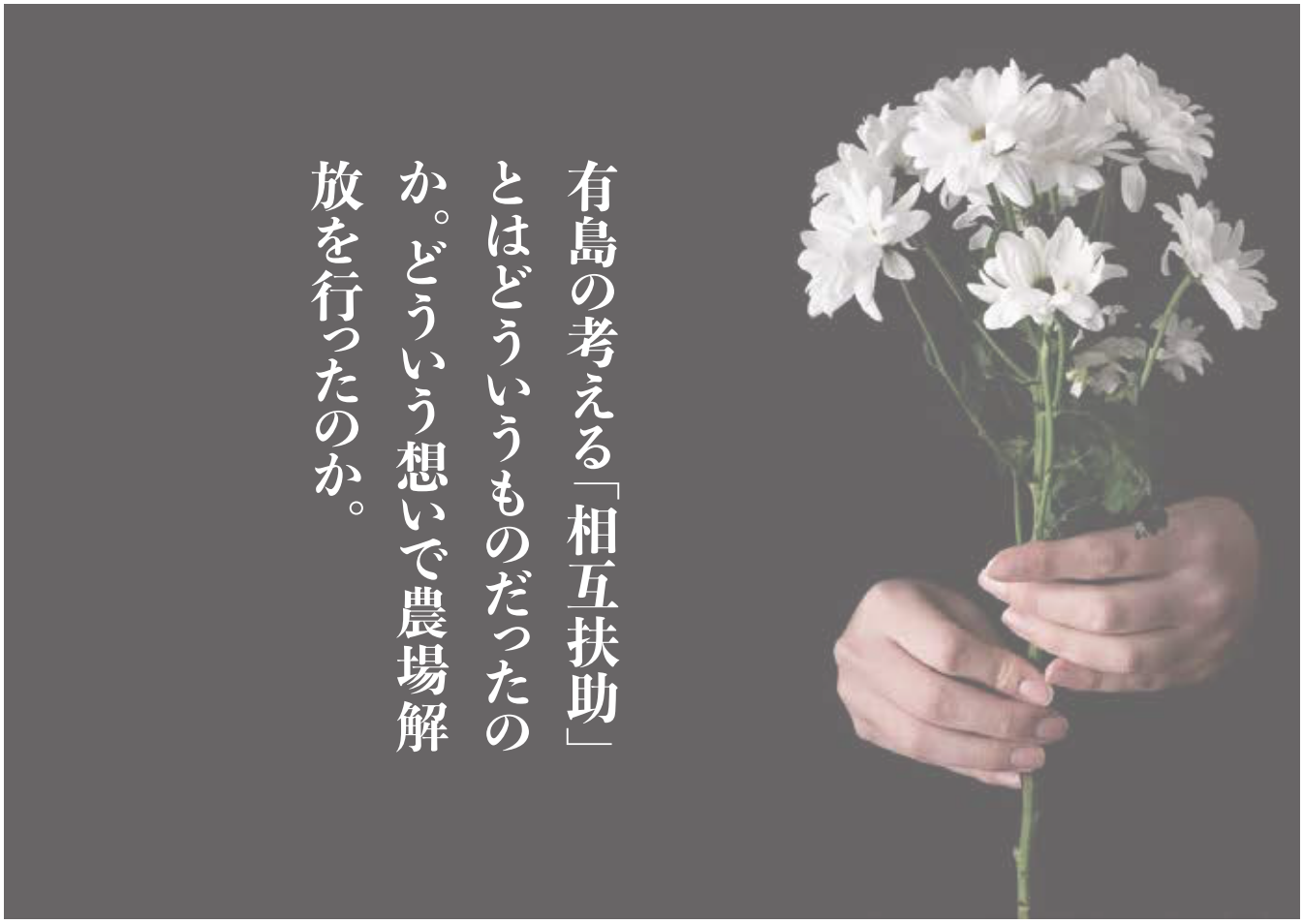
出し合い、共同で耕すようにと言いました。有島が農場解放を宣言した時、国はどうしたと思いますか？彼の行動に反対しました。何故でしょう？（答えを考える）有島が解放した農場は今どうなっていると思いますか？（映像を交えて説明）

私は「相互扶助」という言葉が難しいと思うのです。有島の考える「相互扶助」とはどういうものだったのか。どういう想いで農場解放を行ったのか。そして、彼が農場を解放して想いを託した人々の子孫が現在ほとんど残っていないのは何故なのか。私は子ども達の思考力はあなどれないと思っています。叶うことなら、彼の小説や評論の中の言葉が、相互扶助の言葉に息づいているのを例示できればと思います。

菊地昌子さんは冒頭の文章の中で、有島文学の一端を学校の副読本に載せてほしいと書きましたが、最後にある授業風景と考え合わせると、子どものうちにこそ、有島に触れてほしいと願うばかりです。菊地昌子さん2024年2月2日没99歳。ご冥福をお祈りします。

※注1
姜尚中氏。熊本県出身。政治学・政治思想史。2016年7月、小作人全員の共有として無償解放した農場跡地を訪れたとのことです。（共同通信社写真ストックウェブサイトより）

秋の刈入れ後の有島



特 集

有島武郎を歩く

有島灌漑溝下見会

歩いた人
梅田　滋
藤波　ひとみ
高木　直良
春日井　雅子
櫻井　麻衣子
（土香る会運営委員）
2023.10.29

有島灌漑溝を考える

土香る会運営委員　梅田　滋

2023年は、有島武郎没後百年ですが、また、有島灌漑溝事件のセンテニアルでもあるのです。とは言っても、「有島灌漑溝って、何？」「有島灌漑溝事件って、何？」と疑問に思う方もいらっしゃると思います。

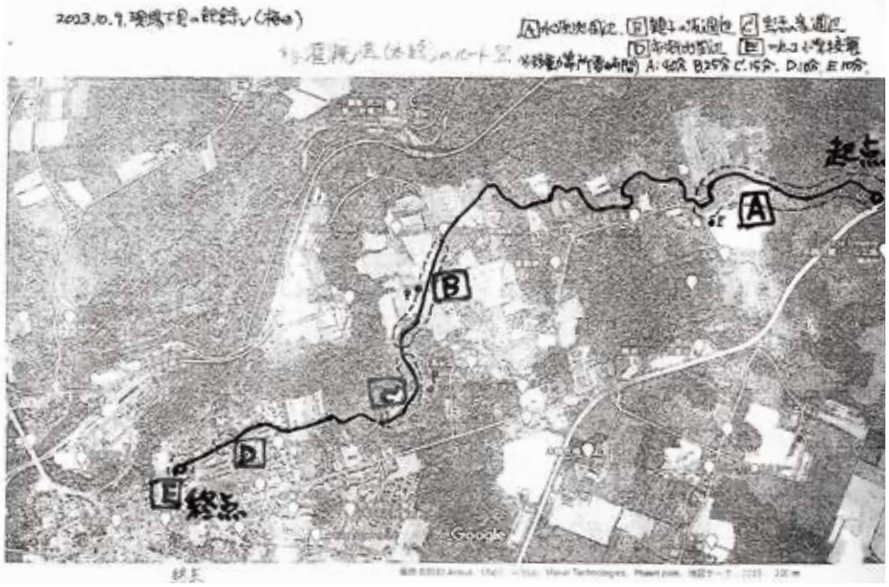
そこで、土香る会では、「有島灌漑溝」についてさまざまな切り口から認識を深めるため、有島灌漑溝に関連する投稿シリーズ「有島灌漑溝を考える」を行います。

その第2回目は、有島灌漑溝の現場を下見したので、そのレポートをお届けいたします。なぜ下見なのかについては、本文をご覧ください。

*第1回はウェブ上で公開されています。詳しくはリンク先（5ページ参照）から、または「終わりにひとこと」もご覧ください。

秋も深まった2023年10月29日（日）、土香る会の運営委員有志5名は、有島灌漑溝の下見会を行いました。この目的は、有島灌漑溝の歴史的資源性について多くの人に知っていただくため、機会を見て広く呼びかけて探索会を開催することを目指し、そのために運営委員会内部で現地の状況を確認する下見調査を行おう、ということになったものです。運営委員会内部でもまだ現地見学をしたことがないメンバーもいたことから、この日は2時間以内で可能な範囲まで足を伸ばしてみることにしました。事前に有島灌漑溝視察の許可をいただくため有島謝恩会の飯塚健造会長にご挨拶に伺ったところ、「今年は例年になく雑草の繁茂が激しく、5月の泥上げと6月の草刈り以降数ヶ月で既に簡単には 足を踏み入れられない状況になっているので、状況のひどいところは諦めて比較的入りやすいところに限定した方が良いのではないか」とアドバイスをいただきました。また、「もちろん全コース約4キロを通して歩くことも、この時期では無理でしょう。全コースを歩きたいのであれば、来年以降、謝恩会が6月に行う草刈りの直後なら一般の方も歩けるので、その時にどうですか」とのご提案もいただきました。そこで、飯塚さんのアドバイスに従って、足を踏み入れやすい5ブロックに限定して下

見踏査コースを設定しました。また、5ブロックを途中車で繋いで各所ごとに車とのアクセスを容易にする必要もありましたので、次のような下見コースを設定しました。当日の実際の状況について、報告します。



有島灌漑溝下見会コース(ブロックごと)案メモより

A 灌漑溝水源地（起点）周辺

車置き場から灌漑溝水源地までのコースは、草の繁茂がかなりひどいですが、歩けないことはないので、車を亀田満吉さん宅地先付近に停めて水源地まで歩いて往復しました。このルートのみで石垣の水路が見られます。地形が比較的平坦なので斜段は設置されていませんが、水源地水門に大きな溜池があります。このため池の造成が、有島灌漑溝事件の発端となり国家権力による弾圧の口実となった歴史的事件をもたらしました。この有島灌漑溝事件の概要については、既に11月9日の本ウェブ記事にてご紹介してありますので、ご覧ください。

(https://tsuchikaoru-kai.org/wp-content/uploads/2023/11/a181328a45590261f61d6b138ab9cdf5.pdf)

往復歩きの移動に若干の現地説明入れて往復40分ほどの予定でしたが、実際には50分程度かかりました。

なお、このコースに特徴的な石組みについて9年ほど前に独自に調べたことがあるので、その折の記事も、参考までに合わせて掲載します。

「有島灌漑溝の「石組み」を再調査しようと思い立ち2014年9月20日、取水口および斜段を中心に現地を訪れた。歴史的産業遺産としての視点から有島灌漑溝に関心を持ち始めたヘリテージ・マネージャーの向田薫さんも同行してくれた。有島灌漑溝の「石組み」については、先立って同年7月から8月にかけて行ったワークショップと現地探索ツアーにおいても、参加者から大きな関心が寄せられた。取水口から導かれる最初の二百メートル程の距離を、直線と緩いカーブの組合せで周囲の緑陰を映し込む灌漑溝は、全コース約4キロの中でも、ひときわ美しい景観をもたらしており、灌漑溝側面の石組みがその大きな要因をなしている。灌漑溝自体がこの石組みによって造形されているのは、この箇所だけである。他にも断片的に石組みで側面が補強されたような箇所はあるが、観るものが歓声を上げるほどの美しい景観を形作っているのは、ここだけである。

また、灌漑溝全コースの随所(10箇所以上)に設けられている「斜段」の多くにも、その側面には石組みが用いられており、灌漑溝全体の中で、石組みが何等かの重要な役割を担っていた事を偲ばせる。では、その役割とは何だったのか。

土木工学的な機能としての役割が主であったろう事は想像できるが、いわゆる「機能美」とい

う結果をもたらしている事も確かであるし、そのような意図的な狙いもあったのかもしれない。ワークショップの参加者が灌漑溝の価値に目覚めることのできた重要なアイコンのひとつが、この石組みの機能美、造形美にあった事は、紛れもない総括ポイントであった。そのようなきっかけから、「この石組みの石材は、どこから持って来たものだろうか。この石組みを施工した「石工職人」はどのような人たちであったか。」という疑問が、大きな命題となっているのである。今回の調査は、「石組みの実相」を現場に赴いて撮影し、基本資料を作成する事にあった。現場調査に同行してくださったヘリテージ・マネージャーの向田薫さんからは、ニセコ駅前中央倉庫群保存活用プロジェクトをコーディネートしている古建築の専門家としての知見から、いくつかの有益なご指摘も頂いた。日本古来の石組み技術の類型から、有島灌漑溝の石組みがどのタイプに属するものなのか、また、その類型であったとして、灌漑溝の現場からどのような特徴と個性を見出す事ができそうか。加えて、その背景にはどのような意図と事情が考えられるか、等々。それらの観点から、有意義なヒントをお聞きする事ができた。さらに、そのヒントをもとに「石組みの謎」を解明するため、今後どのような専門家ネットワークと連携できそうか。現場での会話は次第に深まりと広がりを見せ、今後の調査の深化に大きな手掛かりを得ることができた」

天気に恵まれ、10月末にしては暖かい下見会となりました。左上の写真の灌漑溝に石組みが見られます。

B 親子の坂周辺

車置き場から上流部へ草の繁茂状況がひどくなる地点手前まで行って折り返し、観察しました。このブロックでは、最も身近に斜段を観察することができ、また、少し上流部に遡った地点で、本来の石組み斜段と並んで、その後修復のため完全コンクリートによる斜段とされたものも並置されていることから、石組み斜段の特徴を比較検討できるポイントにもなっています。

歩きの移動に若干の現地説明入れて往復25分。

C 生活の家周辺

車置き場から上流部へ草の繁茂状況がひどくない部分を多少歩いて、生活の家が立地する前の灌漑溝の状況を確認しました。大きな斜段が下流方面に1箇所ありますが、今回はそこまで行きませんでした。

歩きの移動に若干の現地説明入れて往復15分。

D 市街地・住宅地周辺

市街地住宅が建て込んでいる裏手を流れる有島灌漑溝の存在とその意味は、おそらく周辺住民も知らないようです。

車置き場からの観察にとどめ、上下流への移動はしないで5分。

E ニセコ小学校裏（終点）周辺

有島灌漑溝の最終ポイントは、ニセコ小学校体育館裏手の側溝に流れ込むところです。灌漑溝は、この最後の地点で一際素晴らしい輝きを放っていました。それまで住宅地の裏手を流れ込んできた灌漑溝は、小さな自然河川のような細やかな姿を呈し、その最終地点から可憐な自然の滝のような景観を伴って、探索を続けてきた私たちの目を楽しませてくれました。

車置き場からの観察にとどめて15分。

以上の所要時間

50＋25＋15＋5＋15＝1時間50分。

各地間の車による移動所要時間を含めると、約2時間になりました。

最終地点は小さな滝のような風情

灌漑溝を歩いて

歩いた人①

藤波　ひとみ

とても暖かな日で、着ていた厚手の上着は車に置いて歩きました。初めて目にする灌漑溝は想像よりも大きくて水が透き通っていることに感動しました。水源地にたどり着きガイド役の梅田さんや土木工事に詳しい高木さんのお話を興味深くききながら、百年前の人たちの苦労とか喜びや悲しみを想像しました。水ってすごいな、命の源だなあと、改めて感謝の気持ちが湧きました。この美しい場所をずっと守り続けてきた方々もすごいし、ボランティアで保全に関わっている土香る会の会員さんも素敵です。ありがとうございます。

灌漑溝を歩いて

歩いた人②

高木 直良

前回歩いたのは、振り返ると5年も前の2018年でした。今回もほぼ同じルートをたどり、灌漑溝の澄んだ流れと年月に耐えている石積みの精緻な組み合わせ、周囲の紅葉の疎林…お久しぶりという思いで歩きました。

羊蹄山の恵みのカシュンベツ川の流れを利用して、百年も前に稲作に挑み、水田を潤すために灌漑工事は行われました。私の職場体験（自治体の建設部門）に照らして思いめぐらすことがあります。

自然の大地を相手に人工的な土木施設をつくるために最初にしなければならないのは測量です。自然の流れは、地形に沿って、上流から下流へと蛇行しながら自ら流れのルートをつくりますが、灌漑溝は自然地形を読み取って（測量して）一定の速度で水を流すための勾配（斜度）を保ち、起点から終点までのルートを選定する必要があります。目的は田畑の涵養（かんよう）ですから、その配置状況も加味したルート選定となります。

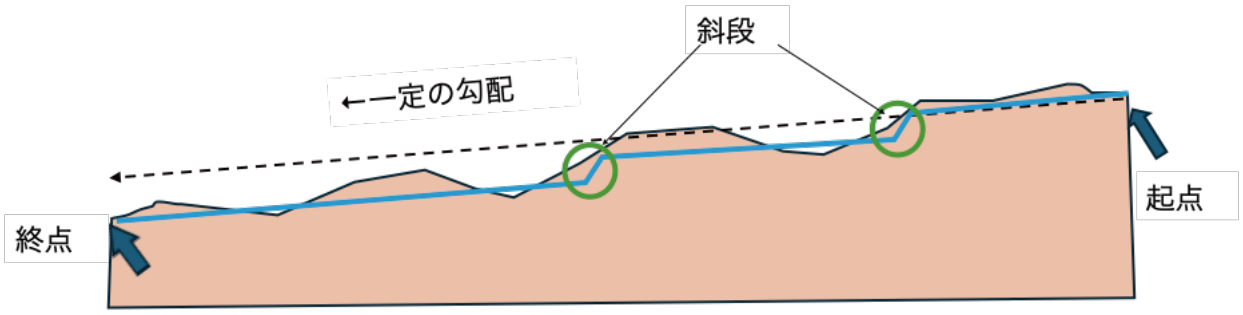
平面的なルートを決め、流れの勾配を一定にすると地形の勾配と一致するとは限らないためにルートの何カ所かで、高さ調整のために落差が必要になってきますが、有島灌漑溝ではこれを「斜段」と呼んでいます。

明治以降、道路や鉄道や疎水（灌漑溝や水路）の工事には比較的早くから測量用器具を駆使する日本人技師たちが活躍しています。

灌漑溝工事とほぼ同時期に王子尻別川第一発電所工事が行われています。水力発電所は川の上流から取水し、トンネル水路で発電所まで流し川の落差のエネルギーを確保してタービンを回しています。ここでも測量技師たちが活躍したことでしょう。

今回の「発見」は、「ミニツアーの終点」のニセコ小学校脇では、灌漑溝が渓流の滝のような落差になっていることでした。暑い夏にここにくれば一服の清涼剤として楽しめることでしょう。

灌漑溝「斜段」のイメージ図



カリフト夜話の読み下し文を作りながら思うこと

斉藤　海三郎

２０２２年から始まった「カリフト夜話」全８輯（しゅう）を読み下し文としてデジタル化するプロジェクトは２０２３年３月に第１輯を完成させ、その後約１年かけて最近やっと第３輯の最終版に至り、まもなく第４輯に着手する。これまでの輯については、コピーの不鮮明さが主な原因で、読み下しに苦労を強いられてきた。判読が難しい個所を読み取るため、また読み下したテキストを完成させるため何度も読む必要があり、掲載されている手紙や文章の内容について、いろいろなことを考えたり、想いを巡らしたりすることがあった。今回、そのひとつを紹介したい。

昔から、文化を創造し、維持発展させてきたのは「金持ち」であるといわれている。実際、歴史を見れば世界三大文明を支えたのはそのような人々であったし、日本の平安時代でも江戸時代でも芸術を含め、文化の繁栄を支えたのは、貴族や金持ちの商人などであった。また、その文化の主な享受者は同じ部類の「金持ち」だった。明治大正昭和においてもその流れは似たような状況だったように思う。

ところで文化の創造者、推進者、享受者である「金持ち」とはどんな人たちなのだろうか。50年ほど前日本のＧＤＰが世界第２位になったころ、日本人でお金が有り余って、マンハッタンの一部を買い取り、高級品を身に着け、鼻高に街を闊歩した成金が顰蹙（ひんしゅく）をかったことがあった。また、当時本当の「金持ち」とはなにかについて議論があった。日本人は自由に使えるお金をたくさん持っているかもしれないが、それをもって「金持ち」とは言えない。なぜなら彼らは自由に使える、あり余る時間を持っていないからだという。イギリスの貴族などの「金持ち」を見ると確かにそうだなと私は納得した。

有島武郎とその一族の生活ぶりを考えると、彼らは「金持ち」の一角を占めていたと思う。有島武郎が若い時に海外遊学を楽しみ、日本で作家活動を続けていたとき、お金の心配は無用だったし、十分に自由な時間があり、創作に専念できる環境にあり、まさに「金持ち」の作家だった。カリフト夜話第１輯と第２輯に載っている手紙類を読むと、武郎とその一族の生活ぶりの一端を覗き見ることができる。第２輯では吉野作造が武郎の思い出を書いた原稿には武郎の身なり、持ち物について語られていて、著者の羨望のまなざしが読み取れる。同時に、「金持ち」であるがための苦悩も語られている。

ところで、古い時代の文化を支えた「金持ち」と文化を享受する層の一致は、18世紀ころから変化してきたように思う。産業革命頃から、経済の発展に伴い、豊かな庶民の層が増加し、文化の享受者になりはじめたからだ。日本でも江戸後期か明治時代頃から同様の変化が始まったように思う。お金持ちではない一般庶民が読者、音楽の聴衆、絵画映画等の鑑賞者として文化の推進者となり、文化の発展に大きな役割を果たすようになってきたと思う。ＩＴ産業の勃興により文化の担い手はもはや「金持ち」ではなく一般市民の側にあるのではないか。文化媒体や施設設備などはいぜん「金持ち」により所有され、支配され続けているが。

土香る会事業報告

運営委員会議の報告

11／28（火）10：00～12：00
・各事業の進捗状況報告（文庫本出版・狩太夜話・会報・未来会・HP）
・2024年度に向けた協議と総会の準備

1／16（火）10：00～12：00
・各事業の進捗状況報告（文庫本出版・狩太夜話・会報・未来会・HP）
・2024年度総会の日程や作業の確認

2／20（火）10：00～12：00
・会報17号の打ち合わせ

3／19（火）10：00～12：00
・各事業の進捗状況報告（文庫本出版・狩太夜話・会報・未来会・HP）
・2024年度総会議案の協議
・会則の一部改正について
・運営委員の改選について

有島記念館事業報告

企画展

- **ミニ展示　ニセコ町の先史時代遺跡**
- **藤倉英幸展　北岬回遊 - 有島武郎没後 100 年記念事業　冬から春の 藤倉英幸展**（11・25 ～ 4・14）
- **小樽芸術村　浮世絵コレクション展**（2・15 ～ 3・17）

普及事業

- **ジョイントリサイタル 秋のニセコに響く彩り豊かな美しき音色**（10・9）
- **イノヤマランド ライブ in NISEKO**（10・28）
- **第35回有島武郎青少年公募絵画展 表彰式**（11・3）
- **館長講話「芸術」の陰謀 歴史から探る～生成AIの登場と創造性**（1・27／2・10）
- **講演会 ニセコ町の先史時代遺跡**（12・6）
- **ギター×詩の朗読×墨のライブペイント、すべてが即興の一期一会ライブ「水の瞬くところ - Improvisation Live -」**（3・17）

第35回有島武郎青少年公募絵画展表彰式(北海道ニセコ町公式**YouTube**チャンネルより)

各事業チラシ
イノヤマランド ライブ in NISEKO、館長講話「芸術」の陰謀 歴史から探る～生成AIの登場と創造性、ギター×詩の朗読×墨のライブペイント、すべてが即興の一期一会ライブ 「水の瞬くところ - Improvisation Live-」

あなたの、こえ
みんな
わたし
声

天から降ってくるスイカと大地に実るスイカ

ニセコ町学習交流センター
あそぶっく　元館長
小坂　みゆき

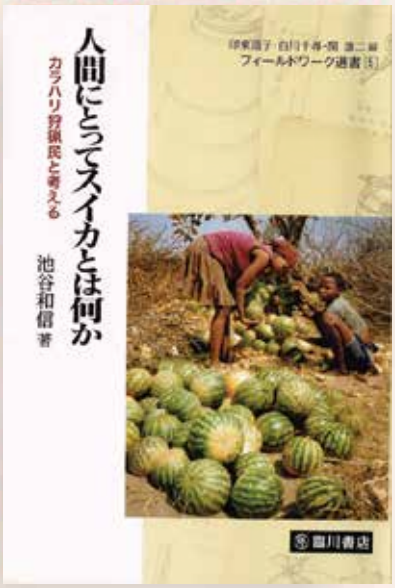
「土香る会」の会報誌ということで、有島武郎を意識して書く内容を考えてみたところ、有島武郎からリビングストンへ、そしてカラハリ砂漠におけるスイカの話しに辿り着きました。本稿では、南アフリカのカラハリ砂漠、ボツワナ共和国、モナポ村のスイカ利用について紹介します。書くにあたり2014年に出版された、池谷和信著『人間にとってスイカとは何か』を参考にしました。

有島記念館の常設展示室には有島武郎が同級生の森本厚吉と一緒に執筆したリビングストンの伝記が展示されています。この本は、明治34（1901）年、有島武郎と森本厚吉が卒業する年に警醒社（けいせいしゃ）書店から出版されました。読者のみなさんも良くご存知の通り、有島武郎とリビングストンとの出会いは有島武郎のキリスト教信仰がきっかけとなっています。執筆理由について、有島武郎と森本厚吉は本の冒頭に「偉大高潔なる人物」が長く日本人に忘れられているのを座視できないということを書いています。

写真68　リビングストンと野生スイカ。

リビングストンとスイカ

リビングストンの印象を鮮明にしたのは、太陽の塔がそびえる万博公園（大阪千里市）に隣接している国立民族学博物館のアフリカ地域に展示されている沢山のスイカの種や、同館の研究員である池谷氏が書いた本のなかで紹介されている「リビングストンと野生スイカ」というタイトルがついた絵です。リビングストンの伝記等にはスイカに関する記述はほとんど見られませんが『世界の伝記　リビングストン』にスイカにふれた記述がありましたのでその一部を紹介します。



『人間にとってスイカとは何か　カラハリ狩猟民と考える』
2014年　池谷和信 著　臨川書店

「結局、本当に改宗したのは大酋長セチュレ一人だったといっていい。そのセチュレが、自分のいる村＝チョヌアネの北方に広がるカラハリ砂漠を指しながら、ある日、なにを思ったかこう話しかけて来た。「あの砂漠を越えて、向こうの側に住んでいる部族のところまで行くことは、わたしたち黒人にもできません。雨が多くスイカのできがいい季節をのぞいてはね。白人のあなたには、とても無理でしょうね」

これは、リビングストンがアフリカ人のセチュレから、カラハリ砂漠に行くことは雨季の野生スイカができる時期を除いては難しいと言われていることを書いた一文です。

この会話の背景を触れるにあたり、ここで、2つの質問を用意しました。

「スイカ」と聞いて何をイメージしますか？

みなさんにとってのスイカとはどのようなものですか？

おそらく日本で暮らす私たちにとってのスイカは夏の風物詩、海水浴でのスイカ割り、夏などのイメージが強いと思います。スイカの皮を漬け物として食べることもありますが、スイカは果物でありデザート的な存在と認識している人が多いのではないでしょうか。しかし、ところ変わると、スイカの意味、スイカの役割は大きく変わります。

カラハリ砂漠モナポ村におけるスイカ利用

スイカの起源地と言われているカラハリ砂漠・モナポ村におけるスイカは、貴重な水資源であり大切な食料として利用されています。スイカの食利用は理解しやすいですが、水資源としてのスイカは想像しにくいです。私たちは水を飲料として、煮炊きなどの料理、入浴、シャワーなど身体を洗う時や、衣服などの洗濯、掃除、食器を洗う時なども使用します。たいていは、住んでいる自治体に水道料を支払い、蛇口をひねると水がでてきて、それを使用します。飲み水としてはペットボトルに入った水を購入するということもあります。

一方、モナポ村で暮らす人たちは、私たちが飲料や料理、生活用水として使用する水の代わりにスイカを使用します。スイカの果実を潰して水の代わりに飲み、液体にして食器を洗い、髪や身体を洗います。液体にする方法は、スイカの実を潰して石灰をまぜて液体化させます。1つのスイカからは約200ccの水分を得ることができます。スイカは主食としてそのまま食べるか、スイカを煮込んだスイカ鍋、スイカを蒸して食べ、乾燥させて保存食にもします。何故、スイカを生活用水として使用しなければならないのかは、スイカ以外で水を得る事ができない、水を得られる時期は12月から3月の雨季という短く

国立民族学博物館　常設展示アフリカ地域展示

限られた期間であり、1年のうち8か月は地表水が利用できないのです。政府が準備した村には井戸があり都市部では水道水が利用できますが、モナポ村には井戸はありません。ここから離れずに暮らしている村人たちは、雨季に集中して降る天水と3か月に一度くるかどうかもわからない政府が用意する給水車を頼るしかないのです。

リビングストンが見た当時のスイカは野生スイカのみでした。現在は栽培もされていますが栽培化されたのがいつかは明らかになっていません。現在、雨季は栽培スイカを、乾季は野生スイカを利用しています。雨季は雨水を生活用水として利用することができますが、乾季になると生活に必要な水を得るために野生スイカを求めて移動しキャンプ生活がはじまります。野生スイカが荒野のどこに生息しているかを知るために、雨季の時にどこで雨が多く降っているかを観察、推測し、その情報をもとに野生スイカの群生地を見つけにでかけます。推測が当たる保証はなく数十キロ移動しながら野生スイカの群生地を転々と移動するのです。

栽培スイカ「ターギ」と野生スイカ「ナン」

栽培スイカと野生スイカは品種が異なり、栽培スイカの糖度は日本のスイカの糖度が10度程度に対し4度程度になり、野生スイカは更に糖度が少ないので生活用水としての使用に適しています。そして、興味深いのは、モナポ村の人たちは、野生スイカと栽培スイカを明確に区別していることです。野生スイカはナン、栽培スイカは総称してターギと呼称されています。そして栽培スイカは「実る」という意味を持つ「コア」という言葉を使用しますが、野生スイカにはこの言葉は使用せず「降る」という意味を持つ「テー」という言葉が使用されます。モナポの人々にとって野生スイカは水そのものであり、実るのではなく天から降ってくるとものと認識されているのです。人々は雨が降ったところにナンがあると言い、キャンプ生活では一日2個のスイカがあれば暮らしていける、スイカがあれば生きていけると村人たちは話します。

先に紹介した伝記の一文にあるように、雨の少ない過酷な自然環境ですが、野生スイカとの出合い、栽培への発展が水をたっぷりと溜めこんだスイカを利用する暮らしを形成していったのです。池谷さんの書いた本のタイトルにもある「人間にとってスイカとは何か」という問いの答は、カラハリで暮らす人々と、私たちとでは全く異なることがわかります。

リビングストンが活躍した19世紀とは

文化人類学を専門としている筆者にとっては、リビングストンを通してカラハリ砂漠の水資源としてのスイカ利用や、文化人類学という一つの学問の成立で語られる宣教師の普及活動などが関心事となりました。それは、有島武郎や森本厚吉のリビングストンへの尊敬とは異なるものになりますが、最後に、リビングストンがアフリカに入った19世紀が文化人類学ではどのように捉えられているかに触れてみます。リビングストンがカラハリ砂漠に入ったのは1845年のことでした。当時、アメリカやヨーロッパでは、医師や探検家、宣教師などが世界の様々な秘境に出かけていき、キリスト教の普及とともに地理、動物、植物、そしてそこで暮らすひとたちについての情報収集を盛んに行いました。ヨーロッパの人々が入ったこと

のない秘境の地に入りますから、星から自分がいる位置を知る測定技術、家を建てる技術、外敵から身を守る力、現地の人が使用している言葉の習得などが必要となります。聖書を片手に信仰心が厚いというだけでは成し遂げられる任務ではありませんでした。当時の人類学者たちは、探検家、商人、宣教師、植民地行政官や旅行家たちが書いた記録に依拠し研究を進め理論を展開しました。ヨーロッパにおける植民地主義の高まりを背景に、初期人類学が学問としてのかたちをととのえていった時期ということになります。研究者自らが現地に赴いていたわけではなかったので、不確かな資料に基づき、西洋とは異なる文化を持つ社会を人類の起源の姿に重ね合わせるなどの空想的な理論を展開した後に批判の対象となります。こうした流れを変えたのが、19世紀と20世紀の曲がり角における、研究者自らが現地へ赴き調査するという方法です。彼らは、文化進化論に方向づけられた反省から、より長期の重点的な調査の必要性を実感していきました。

文化人類学を学ぶ時はこれら宣教師、探検家の活動、というところは必ず学びますが、テキストなどにリビングストンの名前が紹介されることはありません。しかし、初期人類学の形成に登場する宣教師、探検家の一人にリビングストンがいたということは、有島武郎を通して知るリビングストンとはまた違った一面を知ることができて興味深いものでした。

● こさかみゆき
有島記念館で学芸員を務めた後、ニセコ町学習交流センター「あそぶっく」で5年にわたり公共図書館の館長を務めました。館長として、町の図書室を図書館にすることに尽力し、地域に特化した展示にも注力しました。専門は中国東北地方に居住する朝鮮民族に関する文化人類学的研究。2024年3月退任。

終わりにひとこと

「土香る会」に入会してから早一年が経ちました。ニセコにはもう長いこと住んでいますが、なかなか有島武郎について考えることも、新たに本を読むこともなく。それでもやはり「ニセコ」に住むということは、有島武郎に触れることなんだろうな・・・と思っていました。住んで約20年、とうとう有島武郎に触れる時が！そう思いながら編集しています。

今回特集となっています「有島灌漑溝」に関しても、実はそのようなものがあることも、歴史があることも、何も知りませんでした。

私はニセコで子どもを二人育てていますが、彼らは学校においても、特別に有島武郎について学ぶことがありません。遠足で記念館に行くくらいです。もちろん私と同様に灌漑溝については何も知りません。以前から気になっていたのですが、ニセコに住む子どもたちは、有島武郎について知るチャンスが、もっとあってもいいのではないか、と。

そこで、参加者を募って灌漑溝周辺の散策を企画してみるのはどうだろうかと、そのためにはどうしたらいいかと、実行委員の皆さんに相談してみました。そこで開催していただいたのが、「下見会」です。秋の良い日和の、途中でおいしいお茶を屋外で飲みたいくらいの、いい下見会でした。今後、子どもたちの学びの場を作れるような関わり方もできたら良いなと考えています。

そのうち、「土香る会」が子ども議会のように、ちょっとマニアックですが、有島武郎の研究をするような子どもたちが関わって来たら面白いなとも思う今日この頃です。

（櫻井 麻衣子）

起点の水源地／特集5ページのコース図参照

2024年3月31日発行
発行：土香る会（春日井方）
ニセコ町字富士見31-41
0136-44-2106

info@tsuchikaoru-kai.org

原稿をお寄せください。

土香る会の会報編集チームでは，広く本誌読者、会員の皆様からの投稿をお待ちしています。
文章の長さ、内容、種類は問いません。有島武郎に関連するしないにかかわらず、論説、文献紹介、記録、史料、紀行、アイデア紹介およびエッセイなどお寄せ下さい。

感想もお寄せください。

会報がリニューアルされ、皆様の貴重なご意見をお聞かせいただきたく、感想を募集しております。
新しいコンテンツやデザイン、興味を引く記事など、どんなことでも結構です。
ぜひお気軽にご意見・感想をお寄せください。

ARISHIMA

土香る会
ホームページ

https://tsuchikaoru-kai.org